

永遠に渴かない水

奨励	崔 弘徳〔ちえ・ほんどく〕
奨励者紹介	大韓イエス教長老会（統合）派遣日本宣教師 日本キリスト教団泉大津教会牧師 同志社大学神学部嘱託講師

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」

（ヨハネによる福音書 4章13—14節）

幸福を求めていた一人の女性

サマリアのシカルという町に一人の女性がいました。今回取り上げた聖書箇所において彼女は、現世的・現実的なものをとおして幸福を求めていた人として描かれています。彼女は、5回も結婚したことがありますが、すべてが失敗になってしまったようです。睦まじい夫婦生活や団欒した家庭をつくることによって、人生の幸福が手に入れられると考えたのではないかと推察できます。今は、正式に結婚していない男と一緒に暮らしています。それが原因が分かりませんが、彼女は町の人々からの非難を浴びていたし、自分自身も深い羞恥心に陥っていたようです。ですから誰もが出かけるのを嫌がる暑い正午に、人々の目から逃れるようにして井戸に行ったのだと思います。この時、彼女は井戸のところで休んでおられるイエス・キリストに出会われます。イエスは彼女に「水を飲ませてください」（ヨハネによる福音書4章7節）と話しかけられました。このように、ただの「水」をもって始まった二人の対話は、別の次元の「水」の話にまで変わっていくのです。

「この水を飲む者はだれでもまた渴く」。

この13節に記されているイエスの言葉は、表面的には極めて当たり前の話です。この世にある水は、繰り返して飲んでもまた喉が渴くのですから。しかしながら、内容からすれば「この水」とは普通の水ではなく、むしろこの世的なもの、つまり現世的なもの・現実的なものを指しています。したがって、「この水を飲む者は・・・また渴く」という言葉の意味は、現実的なものばかりを求めて手に入れても真の満足や真の幸福を得ることはできないということです。

カント（Immanuel Kant 1724—1804）は、人間には幸福を追求する傾向性（Neigung）が内在している、と述べたことがありますが、一般に人々はその幸福をお金（富）や名誉や権力などの現実的なものを所有することで得ようとし、サマリア人の女性も同じでした。しかし実際には、人々は追求していたものを所有しても決して満足できず、いっそう幸せにしてくれるだろうと思われる何かを求めるようになります。そういう生活を繰り返して過ごしていく中で多くの人々は人生の幻滅さえ経験し、辛い気持ちを抱えたまま生きていきます。このことは、猛烈な暑さの中で絶えず飲料水を飲んでも喉がまた渴くのと同じ原理です。かつて私の知り合いに一人の大金持ちがいました。彼は、世界中で一番優れていると言われるさまざまな自動車の部品を集め組み立て、その車に乗るのをいつも誇りに思っていました。しかし彼は、歳を取るにつれて非常に人生の空しさを感じ、亡くなる前の何年間はほとんど自宅に閉じ込めたままでした。お金は決して彼を幸せにしてくれなかったようです。

皆さん、立派な住宅を建ててそこで暮らしたら幸せになると思いますか。寝心地の良いベッドを買い入れ、その上で眠ったら幸せになるでしょうか。美味しい料理を食べながら「幸せだ」と言う人もいますが、それが真の幸せでしょうか。この世的なものをもっては、しばらくの間はある程度の喜びや満足を感じ、まるで自分の人生が幸福にあふれているように考えられるかもしれませんが、しかし、時間が経つにつれてますますまた虚無に陥っていくようになるのが人生の一般ではないでしょうか。まるで難破して漂流した状況の中で喉の渇きに耐えられず、海水をそのままがぶがぶ飲むのと同じです。海水を飲む瞬間は、渇きが癒されたように感じられますが、時間が経つにつれ喉はいっそう渇くのです。否、むしろはなはだしく痛くなります。この現世的・現実的なものばかりに執着すること自体が、まさに海水を飲んだのと同じであると言えます。そういう点で、「この水を飲む者はだれでもまた渴く」というイエスの言葉は、このような人間世界の実態を指摘しているものではないでしょうか。これはまさに、この世的なものばかりを追求する生き方を止めなさい（stop!）という命令でもあると捉えられます。

「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない」。

14節においてイエス・キリストは、13節で触れた水とは全く異なった次元の水について語っております。「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない」。これは言うならば、一回飲むとそれ以降は渴かなくなる水があるということです。これはサマリア人の女性にだけでなく、今日の私たちにも理解しがたいものです。経験や常識から考えますと、このような水というのは決してあり得ないからです。

ここでイエス・キリストが触れておられる水とは、この世的なものだけでなく、むしろ霊的なもの・超越的なものを指しています。なぜ、イエス・キリストは急にサマリア女性にこのような霊的なものを求めるよう促しているのでしょうか。それは、人間は「霊的」存在だからです。つまり人間は、ただ肉体的であるのみならず霊的な存在でもあるがゆえに、人間にはこの世的なものだけでは決して満足することのできない側面があるということと呼び起こしているのです。

これと関連してもう少し考えてみたいことがあります。まず創世記2章7節によれば、主なる神様は塵で造られた最初の人（アダム）の鼻に命の「息」（靈魂、*neša'mā*; breath, living soul）を吹き入れられました。このことはまさに神様が人を交わりの対象にするために「ご自分にかたどって」霊的な存在として創造されたということを意味します（創世記1章27節、ヨハネによる福音書4章24節参照）。次は、コヘレトの言葉3章11、14節です。そこには「神は（中略）永遠を思う心を人に与えられ」（11節）、「神は人間が神を畏れ敬うように定められた」（14節）と記されてあります。この二つの節には密接な関連があると思います。すなわち、「永遠を思う心」というのは、具体的には「神を畏れ敬う」心だということです。ここで明らかとなるのは、神様は人間にとって創造主であり、人間は神様にとって被造者であるということです。人間は常に神様を思い、畏れ敬うように定められたのです。事実、被造者である人間が創造主なる神様を覚え礼拝すること自体は、人間が人間としての本分を果たすことであり、根本的にはそのような人生においてはじめて人間は真の幸福を享受することができるのです。しかし不幸にも人間は、神様に逆らって罪を犯すことにより墮落してしまいました。その結果、人間は、創造主と被造者という関係を忘れ、まるで神様が存在していないような生き方をするようになったのです。こうした神様との関係により、人間の人生においてはさまざまな不幸な出来事が起こっていると言えます。

しかしながら、イエス・キリストはこのサマリア人の女性に幸せになり得る、否、幸福な人生の原点に立ち返ることのできる道を示しております。イエスが与える水を飲むならば、確かに幸せになるということです。「わたしが与える水はその人の内で泉となり」。ここで言及されている「泉」というのはただ水が溜まっている泉でなく、絶えず底から水が湧き出る泉を指します。そのように人生において真の幸福が絶えず湧き出る、とイエス・キリストは教えておられるのです。それだけではなく、イエス・キリストはこの水を指して「永遠の命に至る水」と言っております。敷衍すれば、この水を飲むならば永遠の命を得るということです。これは驚くべきことではないでしょうか。永遠の命をもたらす水が存在するなどと到底考えられないことでしょう。ここにはキリスト教の核心的な真理内容が現われていると考えられます。

「永遠の命」

「永遠の命」（*he` aio`nios zo`e`*; the eternal life）とは何でしょうか。これは「終わりのない命」（the endless life）を指すものではありません。死なない存在というのはあるはずがないからです。「永遠の命」とは、もともと「永遠の方の命」を指します。永遠の方とは神様です。つまり、永遠の命というのは、神様の命を指します。したがって、イエス・キリストが与える水を飲むならば、人は自分の内に神様の命を受け入れることになります。もちろんこれは、その人が神になるということ（神化）を意味してはおりません。むしろ、私たちが神様の命に与るということを意味します。現実的に限られた存在にもかかわらず、永遠の方や永遠の世界に結びつけられて生きていくことができるということです。それゆえ、この永遠の命にはコインの両面のように二つの側面があると言えます。現世的側面と来世的側面です。前者は現世においても神様の命に与ることにより満足に充ちた真の幸福な人生を過ごすことができる側面であり、後者は終末が到来したとき来世的「神の国」においても至福の中で永遠に生きることができる側面です。もちろん、この両面は不可分の関係にあります。

しかし、多くの人はただ現世的・現実的なものだけに目を向け、そこから満足に充ちた幸福な人生を求めます。ここにいる皆さんは大体大学生ですので、ここで学問と宗教を結びつけて人間の思惟原理から考えてみたいことがあります。一般に言われているように、人間の思惟には二つの原理があります。一つは一定の対象を探究する対象的思惟であり、もう一つは根源的究極を探究する根源的思惟です。前者に属するのが科学であり、後者に属するのが哲学ならびに宗教であります。これらの中で科学というものは、与えられている、言わば経験できる世界の内容を目的的に観察し説明する学問です。したがって、科学においては存在するものの「意味」よりは、「事実」そのものに關心があるわけです。しかし哲学と宗教においては、科学とは異なって、存在するものの本質や意味や価値などを把握することに関心をもちます。したがって、哲学と宗教においては現実の経験世界にとどまらず究極的な根源そのものにまで到達し、それのみならず、それとのかかわりの中で人間の生や歴史、さらには世界などの意味さえ説明しようとし、します。しかしながら、哲学と宗教との間にも相違はあります。哲学は「理性」による認識に基づきますが、宗教は「啓示」による認識に基づくからです。換言すれば、哲学は人間から究極的な実在へという方向性に基づきますが、宗教においては逆に究極的な実在が主体となって自分自身を人間に啓示するという方向性に基づきます。ここで哲学の限界が明らかとなります。すなわち、有限な人間が無限な究極の実在を認識するということは不十分・不完全なものであり、根源的意味では不可能なのであります。さらには哲学的思惟や認識においては、人は永遠なる神との人格的關係をもつことではできません。ここで人間には神からの啓示を最優先する宗教が必要となるのです。

「わたしが与える・・・」

一体誰が、永遠に渴かない水を与えることができますか。イエスは「わたしが与える」と言っております。イエス・キリストご自身が、決して渴かない水、言わば永遠の命に至る水を与えることができるということです。イエス・キリストが、つまり神様の啓示であるイエス・キリストのみが、私たちの人生の渇きを解決し真の幸福を経験することができる永遠の命をもたらすのです。18、19世紀に生きた神学者であり哲学者であるフリードリヒ・シュライマハー（Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, 1768—1834）の言葉を借りて言うならば、イエス・キリストは「根源的啓示」（die ursprüngliche Offenbarung）だからです。これに関して敷衍すれば、イエス・キリストは有限と無限に同時に属している方、すなわち「人であると同時に神」、「神であると同時に人」（vere Deus et vere homo）です。それゆえ、イエス・キリストは神の世界・超越的な世界のものを、この世界・現実の世界にもたらすことができるのです。

今日読んでいただいた聖書箇所の前後においてだけでも、イエス・キリストは「人であると同時に神」であるということが分かります。まずは、イエスは「人」であるということです。彼は、旅に疲れて休みを取られた一人のユダヤ人です。彼は、喉が渇いてそのサマリア人の女性に水を頼まれております。つまり私たちと全く変わらない、私たちと同一の本質を有している人だということが明らかとなります。次に、イエスは「神」であるということです。彼はユダヤ人でありながらも、ユダヤ人が軽蔑し決して行かないサマリア地域に入ることにより、自分自身における普遍的な神の愛を示しております。また、彼がその女性に出会ったのはただ偶然ではなくて、神としての彼ご自身の計画に沿ったものであると推察できます。敷衍すれば、イエス・キリストはサマリア地域に真の幸福や救いを必要とする、つまりイエスご自身を信じようとする一人の女の人がいるということをすでに知っておられたと言えます。たとえば、ヨハネによる福音書1章48節には、イエス・キリストがナタナエルに出会う前にすでに彼を知っておられたという証言があります。これらの内容、すなわちサマリア人の女性とナタナエルとに出会われたイエスに関する内容が私たちに示すのは、まさにイエス・キリストは全知の神様であるということです。もちろんこうした推察だけでは、イエスが神であるということを論証するには十分でないとと言われるかもしれません。ここで、決定的なことを言うならば、「わたしは（中略）永遠の命に至る」水を与えるというイエスご自身の言葉です。なぜかと言いますと、ただ歴史上の限られた存在としては誰も「永遠の命」を得させることができないからです。永遠にかかわっている存在でなければ、決して永遠のものをもたらすことはできません。結局、この言葉そのものが、イエスはとりもなおさず神であるということを明確に示しています。これらをもって、他方では、イエス・キリストは私たちは全く異なる、私たちは相違の本質を有している神であることが明らかとなるのです。

それでは「水を飲む」というのはどのような意味でしょうか。これは「信じる」ことを意味します。イエスが述べられた「わたしが与える水」という言葉において、イエスご自身と水そのものを全く分離して考えてはならないと思います。ここで「水」というのはイエスご自身の人格を指すものであり、さらには彼の言葉や振る舞い、そして生涯すべてを指すものであると言えます。したがって、「わたしが与える水」を飲むということは実際にはイエス・キリストを信じることを意味します。つまり、イエス・キリストを信じるならば、その人は決して渴かない、すなわち永遠の命を得ることができるということです。言い換えれば、イエス・キリストに出会うことによって、私たちは永遠のものや永遠の世界に接することができるのです。たとえば、使徒パウロはダマスコスへの途上で復活されたイエス・キリストに出会った瞬間、彼のすべてが変わるようになりました。そのときから彼は、以前の生活を丸ごと捨てて、完全にイエス・キリストに従う使徒としての新しい人生を歩んでいったのです。そうして彼は、イエス・キリストを宣べ伝えることにおいてさまざまな苦しみに見舞われたにもかかわらず、自分の生について悔いたことはありません。むしろ自分の内で絶えず湧き出る喜びをもって生きることができたのです。これがまさに、彼の信仰の瞬間によって変わった人生です。自分の知性や修養などをおして超越的世界に至ったのではなく、イエス・キリストに捕らえられて超越的世界や神様との関係の中で永遠の命をもった人生を生きていることができたと言えます。

転換点

人生における真の幸福というのは、単に現世的・現実的なものを所有することによってのみ得られるものではありません。むしろそれは、「永遠な方」である神様や超越的な世界に接することによって得られるのです。具体的に言いますと、イエス・キリストとの出会い、つまりイエス・キリストへの「信仰」によってのみ可能なのです。神学者カール・バルト（Karl Barth, 1886—1968）は、信仰によって永遠に接する出来事を「原歴史」（Urgeschichte）と言いました。それは歴史における時間の中で、歴史を超えた永遠に出会うことを指します。まさに、こうした瞬間のような「信仰」の出来事をおして、私たちは永遠の命を得ることができるし、この歴史においても満身に充ちた真の幸福な人生を生けることができます。サマリア人の女性はイエス・キリストを信じるようになり、ヨハネによる福音書4章28節以下によれば、それ以降彼女はすぐさま水がめをそこに置いたまま町の中に入っていき、イエス・キリストを宣べ伝えました。彼女のすべてが一瞬で変わったのです。自分の生活において真の満足もなく、むしろ自分の人生そのものを恥に思い、町の人々とは全く交流もしていなかった彼女が、大胆にその人々に向かってイエス・キリストについて証しをするようになりました。このことは彼女にとって人生における新紀元的な変化なのです。そのような側面で、彼女にとってイエス・キリストはまさに「転換点」（Wendepunkt）であると言えます。このようにして、彼女の場合も有限でありながら同時に無限である、人でありながら同時に神であるイエス・キリストをおして、真の幸福も経験できる永遠の命を得ることができたのです。

2014年6月18日 今出水曜チャペル・アワー「奨励」記録